

子供時代から

プレゼゼン磨け

塾業界 多様化

少子化が加速し、塾業界の多様化が進む中、将来役立つ「プレゼンテーション能力」を子供のころから育成するユニークな塾が注目されている。対話重視のアクティブ・ラーニングを取り入れ、新聞を活用したり、読書の個別指導をしたりして思考力や表現力などを養成。子供が自由に意見を述べられる環境や機会を提供しているという。

みんな意見言える

「風が運びそうやな」「いや、虫が吸っているのを見たわ」

「花粉症なら知ってる」約60人の小学生が通う学習塾「RAKUTO神戸岡本校」(神戸市東灘区)。

パソコンで作ったオリジナルマークを見せ合い、活発に意見交換する生徒ら―東京都港区の子ども未来キャリア塾(篠原那美撮影)



進行役で議論のサポートにネットも活用する。

同塾では、自分の意見をはっきり言える人材を育てようと、授業の随所で、児童らが意見を交わすディスカッションを導入した。10人程度の少人数で、講師は

新聞を活用 思考力養成



アクティブ・ラーニング 教員が一方的に教えるのではなく、児童生徒が議論や発表などを通じて積極的に授業に参加する学習手法。子供が課題探究など能動的に学習し考える力を身につけることを目指す。平成32年度から順次実施される次期学習指導要領で全教科に導入される。

ラーニング研究所の多田恭平さんだ。塾のカリキュラムには「プレゼンテーション能力」や「創造力」などのビジネススキルが並ぶ。小学5年生の女子児童(11)は「学校では、はっきり意見を言つと相手が傷ついてしまうかもしれないと思って黙ってしまうけど、ここではみんなが意見を言える」という。

関心事スクラップ

アクティブ・ラーニングをめぐるのは、新聞を活用する動きもある。昨年開所した「伊東教育研究所」(津市)では、塾生が集う空間に新聞を置き、自由な関心を促している。年長の児童・生徒が新聞の見出しの読めない児童に内容を説

明し、事件や事象について賛否の意見を交わす。関心事をスクラップする児童もいる。

所長の伊東玲さん(58)は小学校の元教員。長く新聞を授業に取り入れてきた。伊東さんは「字が読めなくても写真や図で関心が持てるし映像と違い新聞は繰り返し読み返すので、じっくり考えるのに適しているし、関心の入り口にもなる」と指摘する。

RAKUTOの系列校でも時事問題の理解に新聞を活用しているといい、伊東さんは「新聞は指導が難しいとされるアクティブ・ラーニングに最適だ」と話している。

背景にニーズあり

このほか、東京都文京区の「RISU塾」では、科

マンで聞き出し、表現力を見通した。塾業界にもこうした流れが出てきたことに、ベネッセ教育総合研究所の吉本真代研究員は「一朝一夕には身につかない発表・議論の力を、小さいころから身につけさせておきたいというニーズが背景にあるのではないか」と分析している。

現行の学習指導要領には「言語活動の充実」が盛り込まれており、学校教育でも国語を中心に討論などの機会が増加。平成32年度から実施される次期学習指導要領でアクティブ・ラーニングが導入され、子供同士の話し合いの機会が増える。

「小学生のころから論理的に考え、発言することに慣れていけば、就活でも社会人になっても人前で話すことが怖くなくなる」

こう説明するのは、東京都港区の「子ども未来キャリア塾」を運営するイー・

「学校ではほとんど手を上げたり発言したりしない児童らが意見交換を交わすディスカッションを導入した。10人程度の少人数で、講師は

「学校ではほとんど手を上げたり発言したりしない児童らが意見交換を交わすディスカッションを導入した。10人程度の少人数で、講師は

「学校ではほとんど手を上げたり発言したりしない児童らが意見交換を交わすディスカッションを導入した。10人程度の少人数で、講師は